

② 大学やNPO法人との連携による「こども食堂」などの取組【麻生商店街振興組合】

麻生商店街振興組合	NPO 法人カコタム
<p>昭和32年に「麻生団地」の誕生により、少しずつ商店街が形作られ、昭和38年に市電が延長された頃から活況を帯び始め、昭和39年頃に「新琴似・麻生連合商店会」が発足、その後、昭和48年頃まで年末の大売り出しなどを通じて、商店主の親睦が図られてきた。</p> <p>昭和47年に、地下鉄開通計画の情報や大型店出店のニュースもある中、昭和48年12月、「街づくり」を目的に89店が「麻生商店街振興組合」を設立。</p> <p>○ 所在地：札幌市北区麻生町6丁目14-6 高橋ビル3階</p> <p>○ TEL：011-707-9923</p> <p>○ FAX：011-758-7345</p>	<p>「学びの機会格差問題」は、子供たちの中には自身だけでは解決できない理由で学びの機会が失われ、志望する高校に進学できなかつたり、大学進学を諦めざるを得ない現状があり、その結果、将来、就職できる職業が限られ、可能性も失われている社会問題の一つ。</p> <p>「NPO法人カコタム」は、すべての子供たちがそうした環境変化により、学びの機会が左右されることがなく、自己実現に向けて自らの人生を楽しめる社会を目指すとともに、「楽しい学びの場をつくること」を使命とし、「学びの機会」と「自己肯定感の向上」をキーワードに活動。</p>

「こども食堂」の取組のポイント

「麻生商店街振興組合」は、子育て支援、交通安全、防犯、環境美化、地域交流などの分野で活動する団体「札幌市北区麻生まちづくり協議会」の中で中心的に活動しており、「麻生連合町内会」との繋がりも深く、他の地元団体とも連携が盛んで、様々なイベントにも取り組んできました。

今回の事例は、藤女子大学との連携をきっかけに、商店街地域の子供たちの関わりが深まっていく中で、地域との繋がりを強くしようと始めた、子供たちが安心して集まれ、食事ができる「こども食堂」の取組です。

地域の状況

隆盛を誇った亜麻工場の歴史を後世に残したいと命名された「麻生」は、昭和32年「麻生団地」が誕生し、少しずつ商店街が形成されました。

昭和47年に地下鉄開通計画の情報が飛び込む一方、大型店出店のニュースもある中、昭和48年12月、「街づくり」を命題に地域の89店舗が「麻生商店街振興組合」を設立。昭和52年に策定した「麻生商店街近代化実施計画」を基にハード、ソフト両面から街の活性化策に取り組んできました。

取組の背景

麻生商店街は、直面する少子高齢化社会に向けて、「商いの場」から「交流の場」として、消費者の暮らしに役立つ商店街へと転換を図り、機能充実が求められました。

商店街の店主の高齢化や後継者不足が懸念される中、今後10年先を見据えて、地域団体や他分野との連携協力を構築することが、地域活性化

に向けた商店街の活力向上の解決策の一つと考えていました。

こうした中、麻生商店街では空き店舗を舞台に地域団体等の連携による様々な取組が進められました。

平成21年にオープンした「Café 亜麻人(あまんと)」は、三世代交流広場としての「コミュニティカフェ」を目指したものであり、その開設・運営に当たっては、地域イベントを通じて協力関係を築いてきた、地元で子育て支援を行うNPO法人「子育て支援ワーカーズ プチトマト」との連携によって成り立っています。

カフェ内では軽食の提供のほか、一時保育なども手がけ、子育て中の母親、お年寄り、若者ら、様々な世代の交流拠点となっています。

「麻生キッチン りあん」

麻生商店街の新たな動きとして、藤女子大学との連携によりスタートしたコミュニティスペース「麻生キッチン りあん」があります。

取組のきっかけは、札幌市主催の商店街活性化コンテストで藤女子大学の学生が準グランプリを受賞し、そのアイデアを「あさぶ商店街を元気にするコミュニティハウスづくり」を通じて実現するため、同大学の学生たちが多く住んでいる麻生商店街に相談がありました。

一人親などの子供たちの「居場所づくり」と「学習支援」を目的としていましたが、当初は商店街活性化に対する商店街側との思いのずれもあったものの、学生側の熱い思いに理解が進み、開設に向けた商店街のバックアップにより、「りあん」の前身「へるすたでい 藤麻人(とまん」として、

平成 25 年にスタートしました。

さらに、施設にはカフェを併設し、「学習支援」を受けている子供や保護者、地域の人たちへ栄養バランスのとれた食事の提供も行っています。

なお、「学習支援」は、「NPO 法人カコタム」と連携し、マンツーマンの対応を行っています。

食事の提供は、当初は学生が工夫しながら日替わりで栄養バランスやカロリーを重視した食事を提供していましたが、元飲食店経営者をはじめ自然栽培の「野菜料理」や「おばんざい料理」の提供希望者などによる「1日シェフ」の取組が加わることで、地域住民が集い、新たなコミュニティの場となりました。

この取組を契機に店名を「麻生キッチンりあん」に変更し、現在では日替わりで様々な料理が提供されるとともに、障がい者の就労支援活動を行っている「NPO 法人ぱすとらる」による、就労支援施設の卒業生が気軽に集える場ともなっています。

「こども食堂」

平成 28 年 5 月、「麻生キッチンりあん」が商店街内の空き店舗に移転したのを契機に、「学習支援」で集まる子供たち以外でも、子供たちだけで気軽に立ち寄れる場所として「こども食堂」をオープンさせました。

取組のきっかけは、商店街振興組合の事務局員が、子供たちが夜遅くまで外出している姿を目にしたことと、事務局員自身が子供の頃、父親のもとで働く若い従業員と、皆で一緒に食事をしたことが発端でした。

皆で一緒に食事をすることで繋がりを強くでき、当時の従業員の人達が、今でも近所に来ると顔を出してくれる、などの良い経験がありました。

そんな中、事務局員が他の地域で「こども食堂」の取組が報道されていることを目にし、地域コーディネータ代表と副理事長の 3 人がキーマンとなって、商店街でもスタートさせました。

「こども食堂」は、子供たちだけでも利用できる場づくりを目指していましたが、子育て中の母親が一息つける場所としても利用されています。

経済的に苦しい家庭の子供だけではなく、多くの子供たち、母親たちの利用を促しています。

平成 28 年 5 月から毎月第 3 金曜日に「こども食堂」を開店しましたが、回を追うごとに利用者が多くなり、3 回目の同年 7 月には食事の提供を待つ列ができるくらい、盛況になりました。

食材が不足し、近所のスーパーへ食材を調達した日、初めて「こども食堂」が目指していた、子供たちだけの来店がありました。

「こども食堂」の運営は、食材は寄付やフードバンクの活用などで対応していましたが、食事の提供はキーマンの 3 人にノウハウがなかったため、厨房経験のある「ボランティアスタッフ」を募集しました。



きちんと食材の原価計算をしながら料理もできる豊富な厨房経験を持つ「ボランティアスタッフ」が集まったので、「こども食堂」の運営に大きな助けになりました。

今後の展開

麻生商店街では、「NPO 法人カコタム」との連携をきっかけに「こども食堂」の取組が動き出すなど、「麻生キッチンりあん」を中心にした取組は着実に広がりを見せており、今後もこの取組を続けていくことで、子供たちが安心して過ごせる「まちづくり」を目指しています。

一方で、商店街地域は空き店舗となってもすぐに埋まるくらい、新規出店が盛んですが、商店街振興組合への加入率が低いのが悩みとなっており、商店街地域内の約 450 事業所のうち、組合加入は 90 事業所にとどまっています。

「こども食堂」のような地域貢献の取組は、様々な形でクローズアップされるものの、個々の事業者には、将来、商店街に賑わいをもたらす可能性があることに、なかなか理解が進まない状況です。

今後は、「りあん」や「こども食堂」のさらなる活用を進めていくとともに、地域事業者にとっての組合への加入メリットを、もっと身近に感じてもらえる取組も進めていくこととしています。